

発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷

一 海上より拜む当神宮一

ごあいさつ

宮司 長友安美

滴りを乳とも祀る岩屋神

(蓼汀)

当日南地方は、去る五月二十
六日梅雨入りを宣言され、降つ
たり晴れたり毎日であります
が、氏子崇敬者の皆様方にはお
障りも無く、愈々清安にてお
すこしの事と存じます。

当神宮におきましても、年中
の恒例祭の約半分を、小職以下
職員一同悉くご奉仕申し上げ、
間もなく六月の大被を迎え
るところであります。

さて、最近の我が国を取り巻
く世界情勢は寔に寒心に耐えな
い事ばかりであります。その第
一は、各国の漁業専管水域二〇
〇カイリ(三七〇ノミ)宣言に伴う
ソ連国との漁業権をめぐる交渉
において、彼の超大国の国家意
識と外交戦略にまどわされ、海
上に明確な国境線が引かれる時
代が歴史上始めて到来した事。

第二には、一昨年以来の黄色
い水(石油などの資源エネルギー
も益々に不足し、年間需要
量三億キロリットルの確保も困
難になりつつあるという事。

第三には、韓国よりの米地上
軍の一部撤退による南北朝鮮の

緊迫化など、これら三つの々安
全と資源と水々の確保に、大変
な努力と犠牲とが要求される時
代に移行しているという事であ
ります。

ソ連の文学者シレルは、世
界的資源の限界は早いと題し「
一日食わざればウソをいい、二
日食わざれば物を盗む、三日食
わざれば人を殺し、四日食わざ
れば人を食む。」とも謳ってい
るのであります。

特に近代工業に欠くことの出
来ない石油エネルギーは勿論、
食糧資源としての魚類などの保
持と確保は、無資源国日本に課
せられた国民共通の最大の義務
と考えるべきであります。退廃
的な華美な都会的生活に慣れ切
ってしまった私共におとずれる
のは、英国病、イタリヤ病、否
ニッポン病ともいふべき病に患
されたクひよわな花々であります。

六月の大被を迎えるにあたり、私共は今一度世界の趨勢、日
本の国内事情を冷静な目で見つ
め、観察し、いらざる執着心を
捨て、清心なる生活を営む事が
大切であると考えこの頃であ
ります。

例祭を斎行 昭和五十二年二月一日

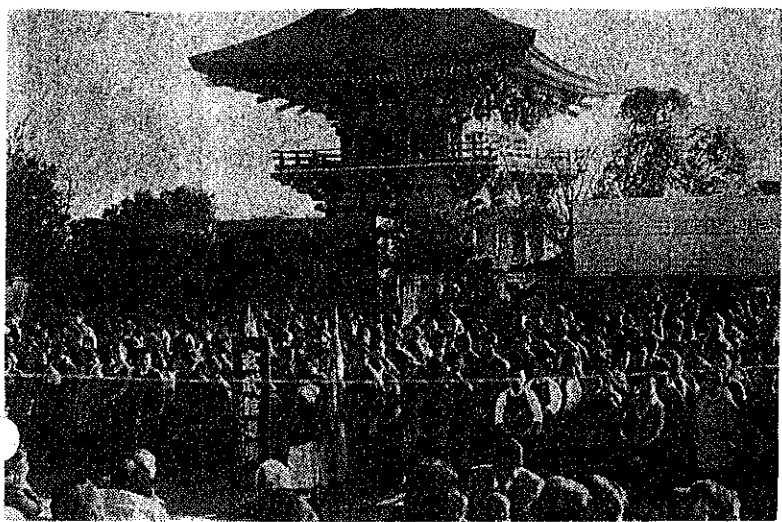
多彩な奉納行事

去る二月一日、当神宮例祭は盛大かつ厳粛に斎行された。前日の前夜祭に引続き、当日も晴天に恵まれ、献幣使に甲斐武教氏(県神社庁長)を迎えて執行

された祭典には、責任役員、氏子・崇敬者総代をはじめ、官公衙、敬神婦人会代表、また英彦山神宮、鹿兒島神宮、霧島神宮、宮崎宮、都農神社、青島神

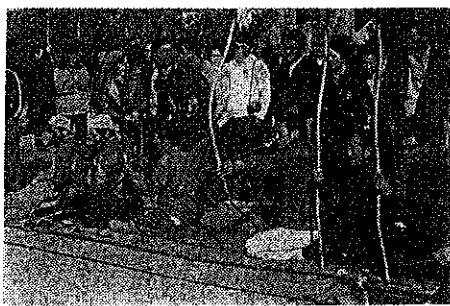
社各宮司など約百五十名の参列があった。

一方、儀式殿前広場では、早朝より恒例の奉納四半の大会が開催され、日南市内の各チームはもとより、宮崎県内各地や、熊本県地方の特別参加の人々を交え約五〇名の選手がその腕を競い合った。本年は、前日の一月三十一日にNHKラジオ「みんなの茶の間」にて、この日南地方の素朴な行事が放送されたためであろうか、例年になく観戦を觀戦する人々も多く見うけられた。



剣道大会の開会式

奉納四半の大会



競技に先だちお競い



熱戦をくりひろげる



四半の大会各部の優勝は次の通りである。

- 団体の部 釈迦尾ヶ野チーム
個人の部 田中義幸(秋の巻)
老人の部 河野清美
夫婦の部 宮川岩男・葉子夫婦

- 「男子」
(小学校) 修道館(延岡市)
(中学校) 思誠館(日南市)
(高校) 宮崎中央高校
(大学、一般) 宮崎北警察署
「女子」
(小学校) 宮師久美(延岡至誠館)
(中学校) 富永浩枝(日南月心館)
(高校、一般) 山口京子(延岡大武館)

新総代などが決定

当神宮では、先ごろより欠員になっていった崇敬者総代や御供上げ総代を補充して、また氏子総代も今春、任期満了となったため、地元区長にお願いして新総代を選出してもらい、左記の方々に今後三年間、当神宮と氏子とのパイプ役としてご苦労願うことになった。委嘱式は風薫る五月四日の皇太子、同妃両殿下御参拝記念祭の佳日に執行し、宮司より本殿において委嘱状が手渡された。

また、責任役員河野礼三郎氏(日南市長、同市観光協会会長)には、市政務の多忙などにより責任役員の辞任の願いが出ているが、先の役員会でこれを受理し、後任に日南商工会議所会頭の河野宗泰氏を推選し、五月三日、氏に委嘱した。

記

昭和五十一年

十一月十五日

崇敬者総代を委嘱します

- 斎藤 豊美 殿
南 正喜 殿

昭和五十二年

一月二十七日

崇敬者総代を委嘱します

- 安藤 福好 殿

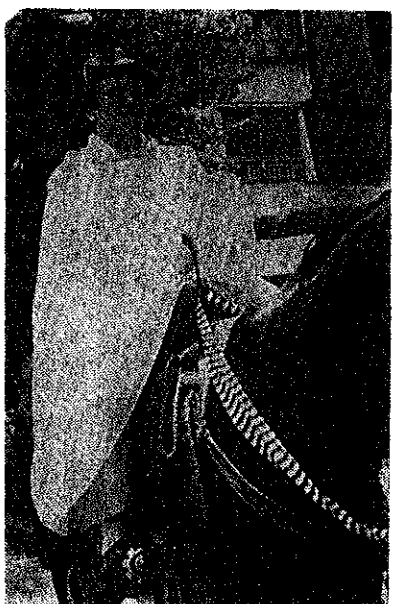


- 和 田 三郎 殿
鶴 田 貞行 殿
鬼 東 健三 殿
長 友 治義 殿
鬼 東 嘉市 殿
今 井 重市 殿
鬼 東 達朗 殿
品 原 利光 殿
品 原 利光 殿
関 屋 利光 殿
品 原 和男 殿
高 崎 正光 殿
増 竹 義也 殿

- 同 一月二十七日
御供上げ総代を委嘱します
下中村 鳥越 茂 殿
下中村 松田 清 殿
同 五月三日
崇敬者責任役員を委嘱します
河野 宗泰 殿
同 五月四日
氏子総代を委嘱します

鵜戸神宮に赴任して

権祿宣 尾方 一郎



尾方権祿宣

去る四月九日、八年間の東京生活を後に一路九州へ新幹線はひた走りに走っている。車中で自分の気持ちでは、まだまだ九州へ帰るとは実感として湧いてこない。東京での事が明確に脳裡に残っている。当神宮へ奉仕が内定したのは三月初め、残務整理、引継ぎ等三月一杯でやらねばならぬ事が次々と起ってくる。挨拶回り、友人等との、「韶らい」もそこそこ日本中

でも気候的に恵まれ、風光明媚な鵜戸神宮へと到着したのは四月十二日の午後であった。

参拝の後、神宮職員の方との紹介も今振り返ってみると、全然憶えてない程自分が興奮していた様子である。スケールの大ききから来る印象から、自分の精神状態が普通でなかったのは明らかである。権宮司様のお話しを聞いていたうちに、一段とまたエライ(?)所へ来てしまったなあ?とイイ年を取っているくせに、我れながら恥かしい気持ちがあった。これも東京での奉仕した神社がこじんまりとした約三千五百坪ぐらいいわゆる民社であり、仕事のにも小規模

であったせいかもしれない。一寸この誌面を借りて、東京でのお宮を紹介してみよう。

東京新宿の「四谷怪談」で有名な四谷界隈を中心とした氏子六、〇〇〇戸ぐらゐの建速須佐男之命・宇迦能御魂大神を江戸時代寛政十八年ごろ、主祭神として、奉斎し俗に「四谷のかっぱ祭り」と呼ばれた須賀神社に奉職していた。この須賀神社は牛頭天王様と呼ばれて、江戸時代厄病流行の際に神徳あらたかの故、今でも病氣平癒の祈願等多い。願ひみれば、昨年新しい神輿が約百五拾年ぶりに出来上り、私にとっても最後のご奉仕

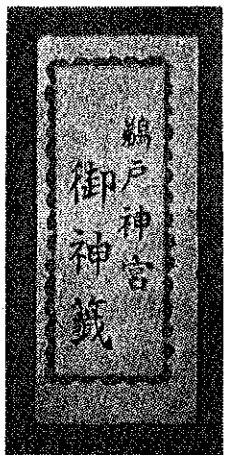
「おみくじ」について

柳 宜 増 川 久 利

人事百穀の吉凶について、神の教示を受けるのが「おみくじ」の目的である。その教示を善意に解して自己の運命を開拓するところにおみくじの価値がある。ただ、くじという場合のくじとは多少意味が異なるのである。くじという文字は、籤・圖・櫛短籙・孔子と書かれている。くじは、あることをなさんとするとき、その順序や吉凶などを決める簡便(手軽)で便利なことな方法である。おみくじは、一枚の紙片であるが人事についての多くのことを一度に占う方法であるところに、常民の親しさと信仰が結ばれ易い簡便な方法である。

史書に記録されているのは『日本書紀』巻二十六、高祖紀四年(六五八)十一月、有間皇子絞殺の一書に、蘇我臣赤兄、楯屋連子代、守君大石坂合部連兼等に短籙(ひねりふみ)を取らせ、謀反(臣下が君主にそむいて戦うこと)の有無の事について占いを行ったとあるものが初見である。これは紙片に何かしるしをつけてひねり紙とし、いくつかを作り、その一つを採

り取らせて、疑を決めたものである。ト占(ぼくせん)を簡便化したあらわれであるが、当時はまだくじという名称はなかった。短籙と書いて、ひねりふみと訓じている。「聖武天皇天平二年(七三〇)正月」の条に、吉凶を占うためのものではないが、くじ引きが行われた記録がある。しかし当



— おみくじ —

時もまだくじという名称はなく、短籙と記されている。その記録によると百官を集めて酒食を給ったとき、仁・義・礼・智・信の五字を記した短籙を、各自に採り取らせて、仁を引き当てた者には綾絹を、義を引き当てた者には絲(いと)を、礼を引き当てた者には布を、智を引き当てた者には組布を与えたとある。当時としては、これらの品物はいずれも貴重品であった。

賞与的なものを余興的に、また比較的何等のやましきもなく、上下の官の差別もなく、公平に行なったものであつて、階級制度のきびしかった時代としては、まことに思い切った催しである。宮廷において、上下官共に拍手喝采の情景を呈したことであろう。下級官の人達の士気はいやが上にも昂揚したものと思われる。これが後世の福引の起源ともなった。

みくじという語は藤原定家の『明月記』(一二三〇年頃)に記されているのが初見である。みくじの、みは美称であつて意味はなく、神仏の御前以外の場所で行く場合は、ただくじとのみ言う習わしでみくじと大別された。たとえくじであつても、おみくじであつても、神仏の御前で引く場合は、大抵はト占の意味が含まれているのである。神意を伺い、御教示を受けるといふことよりすれば、これは当然のことと思われる。

みくじを日本に輸入したのは、僧田仁である。田仁は最澄(伝教大師)の弟子であつて、慈覚大師(二名慈恵大師)といひ、貞観三年(八六二)正月三日に寂したので、その日にちなんで世に、いわゆる元三大師と呼ばれている。大師は承和五年(八

三八)唐に留学し、同十四年(八四七)帰朝の際、仏教と支那の道教の系統を引く有名な観音くじを持ち帰った。この観音くじは、一番から百番まであつて、各番毎に文言が記されている。一番から百番までを、大吉、吉、半吉、小吉、末吉、末小吉、凶の七つに割当ててある。この百番くじは、ト占の古書には大抵記載されている。ちなみに、くじという名称は、短籙の紙に記すものを、竹串に記して用いるようにもなつて、くじという名称が出来たとの説もあるが、定説とはなっていない。

くじ籙の寸法は高さ三十CM、周囲は十二CM、四方の筒に百本の串を納めることになつていった。後世五十本以下の串を納めるようにもなつたが筒の高さは三十CM又は二十四CM、周囲三十CM又は二十四CMに、また番号竹の串の長さは二十CM、番号を書き入れる個所の幅は1CMに作るの、その作法と定められているといふことであるが、現在は守られていないようである。

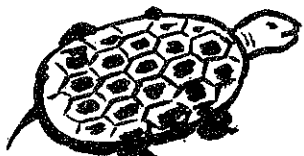
みくじを神前で最初に用いたといふ文献は『増鏡』である。しかし他の名称で、神前でくじのようなものを引いたことは、これより数百年前に溯ることはいうまでもない。『増鏡』の文

献は、くじという名称で、神前で引くことの表れて来た最初である。これは寛文元年後醍醐天皇の御即位について、鎌倉の北条氏は京都からの急使を受けて、鶴ヶ岡八幡宮の若宮白旗宮の神前でくじを引き、左右を定めて、神事を始めたとの記録がある。正長元年(二四二八)畠山満家が、石清水八幡宮に詣でてみくじを引き、家督を定めたことが『南朝紀伝』に記されている。『神道名目類聚抄』(一七二四年)には一・二・三の文字を書き入れた竹を筒に入れ、「その数字を示す」予め定めておき神意を祈りながらそのうちの一つを探り取って占うものであるといふ。

現在の神社で使用されている様式のおみくじが出来たのは、明治初年の神仏分離後である。神の御心・教示としては、明治初年頃発行された『神くじ五十占』という本の序文に、「これまで神社にて仏教の百番

に吉凶をみることとなり来るところ、このたび、王政復古何事も御維新の折から、両部神道は御廢しになり、神社にては、仏の占いを用いるは、いかにかと思われる。このたび、出雲大社の神に祈りて、十七日間神の御前にて、神歌の御さとしを蒙り奉りて、神代の太占(ふとまに)の御心をとりて吉凶の御さとしを、善く天下の神社の広前に置きて、世の人等の吉凶の迷いをば、神のたふとき御心をもちて、おさとし知らしめなば、諸人の助けともなることなり。」とある。

このように現在ののおみくじが、明治の初年頃からのものであることは明らかで、おみくじの最初の行には、神歌になぞらえて、その神社に由縁ある歌が詠まれているものが多いのは、この神くじ五十占いに始まるのである。



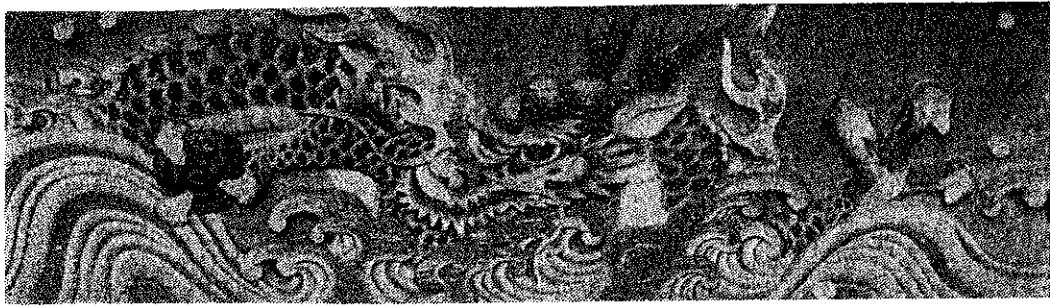
職員異動 (5)

- 昭和五十一年 十二月十五日 権祿宜に任ずる
十二月二十日 願により其の職を解く
昭和五十二年 四月一日 巫子見習を命ずる
四月十日 鵜戸神宮権祿宜に任ずる
須賀神社権祿宜 尾方 一郎
近畿日本鉄道会長 佐伯勇氏参拝
愛知県神社庁参拝 岡多教参拝
広島東洋カープ球 団必勝祈願祭
第二十五回剣法発 祥鶴戸山顕彰剣道 大会執行
三月十六日 皇学館高校三三〇 名参拝
三月二十二日 宮崎老人福祉セン ター五十名参拝
三月二十七日 長崎県龜山八幡宮 祿宜河原忠孝氏参 拝
三月二十八日、四月五日 高根県大社国学館 生那須隆盛君社務 実習
四月二日 責任役員会
四月二十九日 天長祭
五月一日 瀬戸開拓義勇隊「 桃山会」戦没者慰 霊祭(儀式殿)
五月八日 鶴戸さんいさみ太 鼓子供会によりい さみ太鼓を奉納
五月九日、十日 神道青年九州地区 総会、九州地区神 職総会に神職四名 出向(福岡県)
五月十七日 別当宮司先賢慰霊 祭(於別当宮司墓 地)
五月十八日 東京川島家氏神祭 奉社
五月二十三日 神社庁南那珂支部 総会に神職五名出 向(串間市)
五月二十七日 和歌山県日前国懸 神宮宮司紀氏他参 拝
五月三十日 大阪浪速高校一五〇 名参拝

社務日誌抄

- (昭和五十二年正月より)
一月一日 歳旦祭 賀表を奉 呈する
一月三日 元始祭
一月八日 正月に奉供の祝餅 を市内老人ホーム 三カ所に御神酒を 副えて頒賜
一月二二日 オーストラリア連 邦第一次産業大臣 一行参拝
二月一日 例祭
二月二日 四半の大会奉納 風田、下中村両 部落恒例の歌合 戦を奉納
二月二日 近畿日本鉄道会長 佐伯勇氏参拝
二月四日 愛知県神社庁参拝 岡多教参拝
二月六日 広島東洋カープ球 団必勝祈願祭
二月十一日 紀元祭
二月十八日 稲荷神社初午祭
二月二十二日 山形県神社庁参拝 団一行参拝
二月二十四日 福島県神社庁参拝 団一行参拝
二月二十六日 桃山監区御陵監吉 田敏夫氏参拝
三月四日 北海道余市神社宮 司星野一誠氏参拝
三月十二日 責任役員会開催

鵜戸山散歩(5) 神獣たち



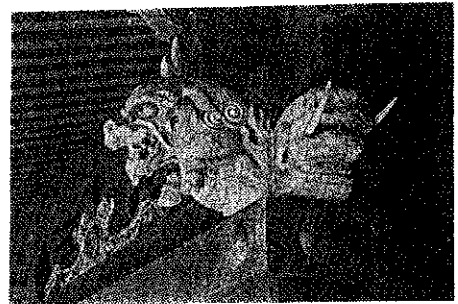
今回の本欄は、当神宮の神獣たちと題して主に本殿の諸々の彫刻を紹介してみたい。

当神宮の創建は、第十代崇神天皇の御代と伝えられているが、その後第五十代桓武天皇の延暦元年(約一千二百年前)には、天台宗の僧侶、光喜坊快久が荒廃した神階を再興し、また寺院も建立して、勅号を鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺と賜わり、初代別当になったと言われている。以来宗派は真言宗に変わったこともあるが、当宮は「西の高野」と言われ、鎌倉時代以降あらわれた真言密教と神道とが結合、習合して成立した神仏習合の神道である両部神道の一大道場として、明治初年までその信仰が続いたのである。

こういう仏教との関係から、神殿は色彩も鮮かな朱塗りで、装飾の彫刻や絵画は、現代の私達をして今もなお鎌倉、室町時代まで溯って、両部神道の世界へと誘う雰囲気を感じさせている。

別けても彫像は繊細で美しく、象、獅子、鳥あるいは架空とも思えるいろいろな神獣たちが

の表情はおもしろい。(写真)



また、ご祭神鵜嶋草葺不合尊の御母君豊玉姫命は、本殿の鎮まります洞窟内で御子をご出産される時、海神のご本来の姿「龍」になられたという。こういう由緒からであろうか、しぶきをあげて波間に浮かぶ龍の彫刻(写真)は実に壮観である。

さて、去る昭和四十七年の春、奈良県明日香村の高松塚古墳から極彩色の壁画が発見されたことは私達の記憶にまだ新しいところである。飛鳥の貴人や美女たちの華麗な姿もさることながら、それに交じって玄室東壁の青竜、北壁の玄武、西壁の白虎の四神(もう一つは朱雀)を描いた絵も興味深い。四神は四つの方向をそれぞれに分担して

囲み、特に貴いところを守護する役目を持っていたのである。

当宮の神獣たちは、御殿の四方、八方にいて、あるいはいかめしく威厳を以って悪魔を追っ払い、あるいはユーモラスな顔を以って参拝者を暖かく出迎え、または優雅な容姿を以って大神様のお伴をしてくれているのである。

したがって二千有余年の当神宮の輝ける歴史は、ひとつにはこれら神獣たちの無言の献身的奉仕にささえられて来たと言っても過言ではあるまい。神獣たちが生まれ、各自の素質や特技によって任務の分担を定められた頃より、時は移り、世状も変遷を重ねて来たが、神獣たちよ、願わくは今まで通り永遠にその持ち分けた才能をそれぞれに發揮しつつ、一致協力して共通の目的である神宮守護の重責をはたしてくれんことを。

そして、私利私欲にのみ走り、国家の存在の大本をも忘れてしまった日本人に、本来あるべき日本人共通の目的は何であるか。今、警鐘を打ち鳴らしてほしいものである。

(本部)

編集後記

◎「鵜戸」第九号をおとどけ致します。

◎今紙は昨年未より今日までの、例祭を始め新役員、総代、職員を紹介、それに既号に掲載した剣法発祥の地に囲むレポートの続篇、神社には社頭に於ておなじみの「おみくじ」に關する歴史の考察などを収録してみました。まだまだ未熟な当誌ですが、皆様のご叱声により益々紙面の充実を計って行きたい所存であります。

◎今度の各国の二〇〇カイリ専管水域宣言により、我國漁業は手痛い打撃を蒙るることになりました。特に日ソ漁業交渉でソビエトは、超大国主義からくる、力での我國への絞め付けを行ってきたのでありますが、今回の交渉は、一応我國の粘り強い外交がソ連の力の外交に勝利を納めたといえるのではないでしょう。

また我國には、斯界、積年の懸案でもある北方領土返還の運動が残っております。今回の日ソ交渉を冷静に判断し、領土という国の将来をかけたこの問題に、私たち国民は一人一人が強い関心を持ち、根気ある運動を展開して行かなければならないと考えます。(本部)